

ガクチキ



ガク☆チキ探訪

～狛江第一中学校～





ガク☆チキ探訪

～狛江第一中学校～ 市内で最も歴史ある校舎

学校は地域の中にあり、地域は学校と密接な関係性を築いています。

学校を訪ねれば、地域とのつながりを垣間見ることができます。

そんな学校から見えてくる地域とのつながりを紹介する

ガク☆チキ探訪2回目の今回は、狛江第一中学校を紹介します。



ひぐち とよたか 樋口 豊隆 校長(左) あらた つとむ 荒田 勉 副校長(右)

狛江第一中学校(通称一中)は、昭和22年に狛江で初めてとなる中学校として開校されました。開校当時は、戦後の資材不足と財政難の中、新しい校舎を作ることができず、四谷区教員農園の付属建物を借りてのスタートになりました。現在の地に校舎が建てられ、移転したのは、翌年の昭和23年。昭和36年に建てられた北側校舎(通称2号館)は、大規模改修等を経てはいるものの、建設当時の姿を残す、市内で最も歴史のある校舎です。



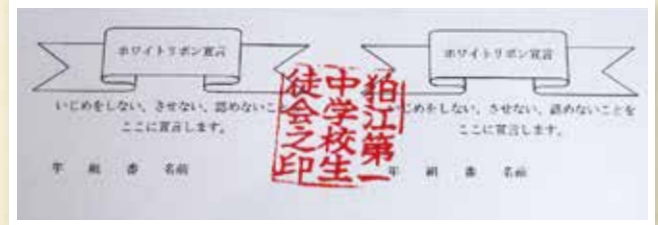
昭和43年の北側校舎



ホワイトリボン運動

～一中独自のいじめ撲滅に向けた活動～

生徒会を中心にいじめ防止を呼び掛け、賛同者を集めることでいじめ撲滅をめざす運動。賛同者は、「いじめをしない、させない、認めないことをここに宣言します」という宣言書2か所に署名。その用紙を中央で契り、左半分を生徒会に提出し、右半分を携帯するとともに、交付されるホワイトリボンを制服やかばん等につけることで意思表示する。平成22年度に開始し、これまで多くの賛同者を集めてきた。



ホワイトリボン運動の広がり

一中の新たな伝統は、次世代へと脈々と受け継がれ、そして海を越えて世界へと広がっています。

小学校へ



『出張!!ホワイトリボン運動!!』

平成31年1月24、25日に柏江第一小学校にてホワイトリボン運動が行われました。この日、出張した生徒会役員の4人中、3人は一小出身。もうすぐ一中生になる6年生たちは、真剣に先輩たちの説明を聞いて、積極的に運動に参加しました。



地域へ



『先輩から受け継いだバトン』

柏江市教育委員会の有馬教育長と教育委員がホワイトリボン運動に参加しました。鈴木委員から「息子が一中生のときに始まったこのホワイトリボン運動が、今も後輩の皆さんに受け継がれていることが嬉しい。『いじめをなくしたい』という気持ちを持ち続けることが一番大切」というお話がありました。



そして世界へ!



『Bienvenidos!』

訪日したドミニカ共和国のバルカセル青年大臣 (Mrs. Robiamny Nadesha BALCÁCER) に、ホワイトリボン運動を紹介しました。ドミニカ共和国の青年省はいじめ問題を重点課題のひとつとしており、一中独自のいじめ撲滅活動に熱心に耳を傾けていました。



ドミニカ共和国って??

首都: サントドミンゴ
人口: 約1,076万人
(2017年: 世銀)
公用語: スペイン語



新しい風を

一中の原動力は委員会活動にある!

委員会ではイベントの企画から運営までを

生徒が自主的・主体的に行っています。

全校生徒が一丸となって企画を盛り上げます。

専門委員会

各委員会に分かれ、学校生活における課題や解決策についての議論、イベントの企画等を行います。

中央委員会

一中の最高意思決定機関。各委員長が集結し、専門委員会で議論した内容の報告と質疑応答を行います。

生徒会朝礼

生徒会を中心に、専門委員会と中央委員会で決定したこと(イベント等)を全校生徒に周知します。

全校生徒

委員会が企画したイベントを全校生徒で協力して実施し、活気ある一中づくりを推進します。



生徒会長
しらかわ まさと
白川 真聖さん



1年学年委員長
ありが れん
有賀 蓮さん



2年学年委員長
よした れんし
吉田 蓮士さん



3年学年委員長
なかむら ななみ
中村 菜々美さん



美化委員長
しらかわ みよみ
白川 聖深さん



図書委員長
かねゆき みか
金行 美香さん



体育委員長
とよだ じゅんぺい
豊田 隼平さん



報道委員長
さいとう ななみ
佐藤 七海さん



保健給食委員長
はしもと hisaki
橋本 悠希さん

新旧生徒会長に聞く

中央委員会の中心、それが生徒会。全校生徒による選挙により選出された生徒会長以下、5人の役員で構成されている。(平成31年3月現在)

現会長の2年 白川真聖さんしらかわ まさとと前会長の3年 牧野莉子さんまきの りこが一中への想いを語った。



左からくわはら葉原先生、まきの牧野さん、しらかわ白川さん、かわの河埜先生
「先生との距離が近く、生徒の提案した企画にアドバイスをくれたり、サポートをしてくれます。(白川)」

図書委員会 ~クリスマス会~

専門委員会は、各学年を代表する学年委員会と体育・報道など各分野の委員会、それらを束ねる生徒会の合計9つの委員会から組織されている。

今回は専門委員会の1つである図書委員会が開催するクリスマス会に密着した。



真剣に準備する図書委員



クリスマス会プログラム

牧野さん(前会長。以下「牧」):委員会活動はすべて生徒が主体となって企画、運営、実行しています。一中の良いところは、目標があるとひとつになれるところですね。

白川さん(現会長。以下「白」):確かにイベントになるとどのクラスも全力でひとつの目標に向かって団結します。そう考えると、一中全体としても団結できてるんですが、生徒会はその大きな役割を担っていると思います。生徒会活動は校内にとどまらず、地域の児童館の愛称を決めたんですよ。

牧:校長先生から「平成31年4月に開館する北部児童館の愛称を決めてほしい」という話を受け、全校生徒を巻き込むことにしました。まず名称を募集し、候補をしばって全校生徒を対象にアンケートをとったんですが、最後の2つが僅差になってしまい、一度生徒会に持ち帰りました。全員で真剣に議論し、すでにある名前と被らないこと、親しみやすく小さい子どもでも言いやすいこと、という観点で最終的には「こまっこ」に決めました。

白:牧野先輩を見ていて、生徒会長は全

校生徒の前で話すことも多く、仕事量が多くで大変だろうなあと思っていました。

牧:生徒会活動はとにかく楽しかったです。迷ったときは必ず話し合い、仲間と練り合っってひとつのものをつくることで、自分の成長につながりました。特に力を入れたのは「ホワイトリボン運動」といういじめ撲滅運動です。「いじめを世の中からなくしたい」という先輩の想いから始まった、一中独自の活動です。歴代の先輩方の想いを途絶えさせたくなかったんですが、目に見える形にするのが難しくて…。白川さんや後輩の皆さんにも、地域を超えてもっとこの活動を広めてほしいです。

白:私の生徒会長としての活動方針は「新しい風を!」です。新しいことに挑戦するのはもちろん、これまでの伝統にもうひとつ手間加



えたいんです。良いものを受け継ぎ、更に良くして次の代に引き継いでいくことが目標です。そのためには、生徒の皆さんのこうやってほしいという声が生徒会にもっと届けばいいと思っています。

牧:みんなの意見が届いて、生徒会が引っ張って行く。でも、生徒会が独立して権力を持つのではなく、学校としてひとつになってどんな些細なことでも取り組めるようになってもらいたいです。

白:一中の伝統と聞くと「八郎*」を思い出します。ひとりが仲間のために、自分のできることを精一杯やる、というこの民話の教えが、一中の校風にもつながっている気がします。

*東北地方に伝わる民話で、主人公の八郎が水害から村人を救ったとされる。一中ではこの八郎の精神を以前から大切にしている。

クリスマス会は生徒誰でも参加可能な一大イベントです。当日に向けて、図書委員は全員で話し合いながら内容を決め、美術部と協力しすべて手作りで準備しました。

本番をむかえ、会場となった図書室は生徒と先生でにぎわい、入りきらないほどの参加者が集まりました。

プログラムは、^{しばみや}司書の芝宮さんの本紹介、文芸部の部誌紹介、紙芝居、クイズ大会、ビンゴゲームと続き、丸田先生がマジックを披露。最後に、有志の先生たちが踊りつきで合唱すると、一番の盛り上がりとなり、みんな笑顔でクリスマス会を終えました。



クリスマスにちなんだ紙芝居の披露



丸田先生の不思議なショー



先生方によるパフォーマンス



ビンゴ大会を楽しむ参加者

学校から つながる輪

子どもたちにホンモノを！
一中のスーパーアクティブな1年間には、
こんな方々が関わっています。
各分野で活躍している
国際的な外部講師や地域の方を招き、
継続的に交流を図っています。



留学生による授業と 揚琴演奏

台湾からの留学生が来校。陳彥妍さん、
ファンミン、
黄敏さん、
デンジン、
鄧靖さん、
みうら なおや
三浦直矢さんが、
ゲストティーチャーとして1年生の社会
科の授業を行いました。台湾の中学校
の時間割が8時間目までであること、フォ
トジェニックな観光地や食べ物話題な
ど、台湾の文化や魅力をクイズ形式で
楽しく紹介していました。また、伝統的な
民族楽器「揚琴」の奏者である龍紀佑
さんが演奏を披露。その美しい響きに
聴き入ったあとは、生徒たちが楽器に
触れ演奏を体験しました。龍さんは揚
琴を日本に広めたいという。

チャング奏者と 日韓太鼓共演

1組の和太鼓と韓国チャング奏者の
チヨウギチヨル
趙基哲さんが第8回中高生フェスティ
バルで共演しました。交流は今年で3
年目。韓国は3拍子、日本は2拍子と太
鼓のリズムに違いがあるものの、中学
生らしい力強さとチームワークをみご
とに表現していました。趙さんは「音楽
は日韓の架け橋になる。隣の国同士、ま
たその隣の国と分かち合うことで自分
を大事にできる。そして分かち合うこと
であなたたちも優しくなれる。」と音楽を
通じた交流の大切さを教えてくれました。



ロンドン五輪日本代表の 「陸上教室」

パナソニック女子陸上競技部コーチ
の吉川美香さんが、持久走のコツを2・
3年生に指導しました。毎年生徒たち
に好評のこの教室。中学生「東京駅伝」
大会の代表に一中から過去最高の14
名が選考されるなど成果も上がってい
ます。吉川さんは「走ることは全てのス
ポーツの基本。自分の心との戦い。目
標に向かってチャレンジすることが大
事!」と話す。校内のロードレース大会で
優勝した3年生の菊池竜治さん・岩崎
千紘さんは「腕の振り方、前方を見るこ
となど吉川さんの指導を活かせまし
た」と笑顔で話してくれました。



明治大学ハンドボール部との交流会

関東学生秋季1部リーグ戦で準優勝を果たした明治大学ハンドボール部から加藤良典監督と4名の選手が一中に來校。男女ハンドボール部の指導を行いました。明大ハンド部の指導は昨年引き続き2回目。久しぶりに会う子どもたちの成長に加藤監督も目を見張っていました。カウンターやクロスパスなど、連携プレーの指導もあり、楡井風矢さん・寺岡咲子さん男女両キャプテンは「いつもの練習と違って新鮮でとてもためになった」と充実した表情で話してくれました。

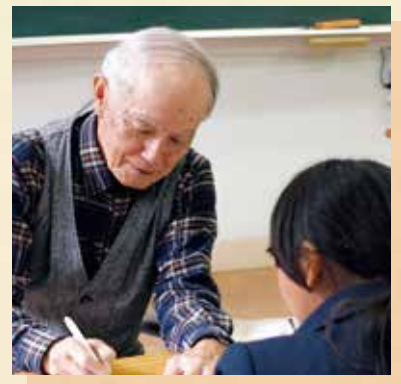


狛江のスーパーボランティア

長年、狛江の子どもたちのために、公民館で学習の指導などのボランティア活動を行ってきた有馬祐三さん。中学生「東京駅伝」大会の特別コーチとしても活動し、子どもたちの成長をいつも近くで見守っています。

「狭い狛江だからこそ、子どもたち一人一人と関わることができる。みんなが元気で素直に育っていけるように『狛江のスーパーボランティア』としてこれからも活動していきたい。」

地域の子どもたちへの思いを熱く語ってくれました。



有馬さんは、海外から來日した生徒に学習支援の活動を行っています。

はじめは数学の時間。「一番苦手な分野から始めるんだ!」と有馬さん。解けるかな??九九を暗唱して、かけ算の計算もしっかりできました!

次は国語の時間。有馬さんが持ってきた本を音読して、発音や漢字の読み方の学習をしました。

そして最後は、しりとりでの学習。たまご→ごま→まり→りす……あり→りか→かめら→らつきょう……楽しく日本語を覚えることができました。



子どもたちの体力向上と コミュニケーション能力を育むために

一中のホームページを眺めていると、MRC自然研究部という聞き慣れない部活動の名前が。MRCは“将来、自然の事象に興味関心を持った時に、研究ができるように体力をつける部”で“もしあなたが帰宅部を選択しようと思っているなら、MRCに入りましょう”と勧誘しています。

果たしてMRCとはどんな部活動なのでしょう。

MRCは、“Maruta Recreation Club”の略称で、ふくしま まさえ福島正恵先生・まるた あきお丸田昭男先生が顧問を務める“文化部”です。現在の部員は36名。毎週火曜日から金曜日の朝、7時50分から8時10分までを活動時間としています。

MRCには、決められたルールや日課はなく、また、垣根もなく誰でも自由に参加できます。スポーツ用具やレクリエーショングッズだけが用意しており、あとは子どもたちの自由な発想を尊重しています。子どもたちは校庭に飛び出し、遊び感覚で自由に体を動かしています。

習い事の関係で部活動に所属していない子や運動が苦手な子など、参加している子どもたちもいろいろ。運動が苦手な、運動部は敷居が高いと思っている子どもたちも、MRCならば気軽に参加でき、自由に体を動かしながら、知らず知らずのうちに体力をつけているのです。また、自分たちでその日の活動やルールを決めることで、コミュニケーション能力も養っています。

さらに、“文化部”として活動の幅は、朝の運動だけにとどまりません。春や夏の長期休暇に、高尾山の登山や天文台・水族館などへ出かけていき、校外学習も実施しています。理科教員の福島先生・丸田先生ならではの活動です。

MRCはその名のとおり、丸田先生が長年にわたって取り組んできた活動です。前任の狛江第二中学校、さらには世田谷区の中学校で教鞭をとっている頃から、MRCの活動に取り組んできました。

そんな丸田先生にMRCや子どもたちへの思いを尋ねてみました。

「自由な時間が余りない今の子どもたちに、MRCの活動を通じて、いろいろな発想を育めるようになってほしい。また、人に対する優しさ、仲間外れなどしないで多様性を認められる、そういった子どもになってほしい。」

今日も丸田先生は温かい眼差しで子どもたちの成長を見守っています。

